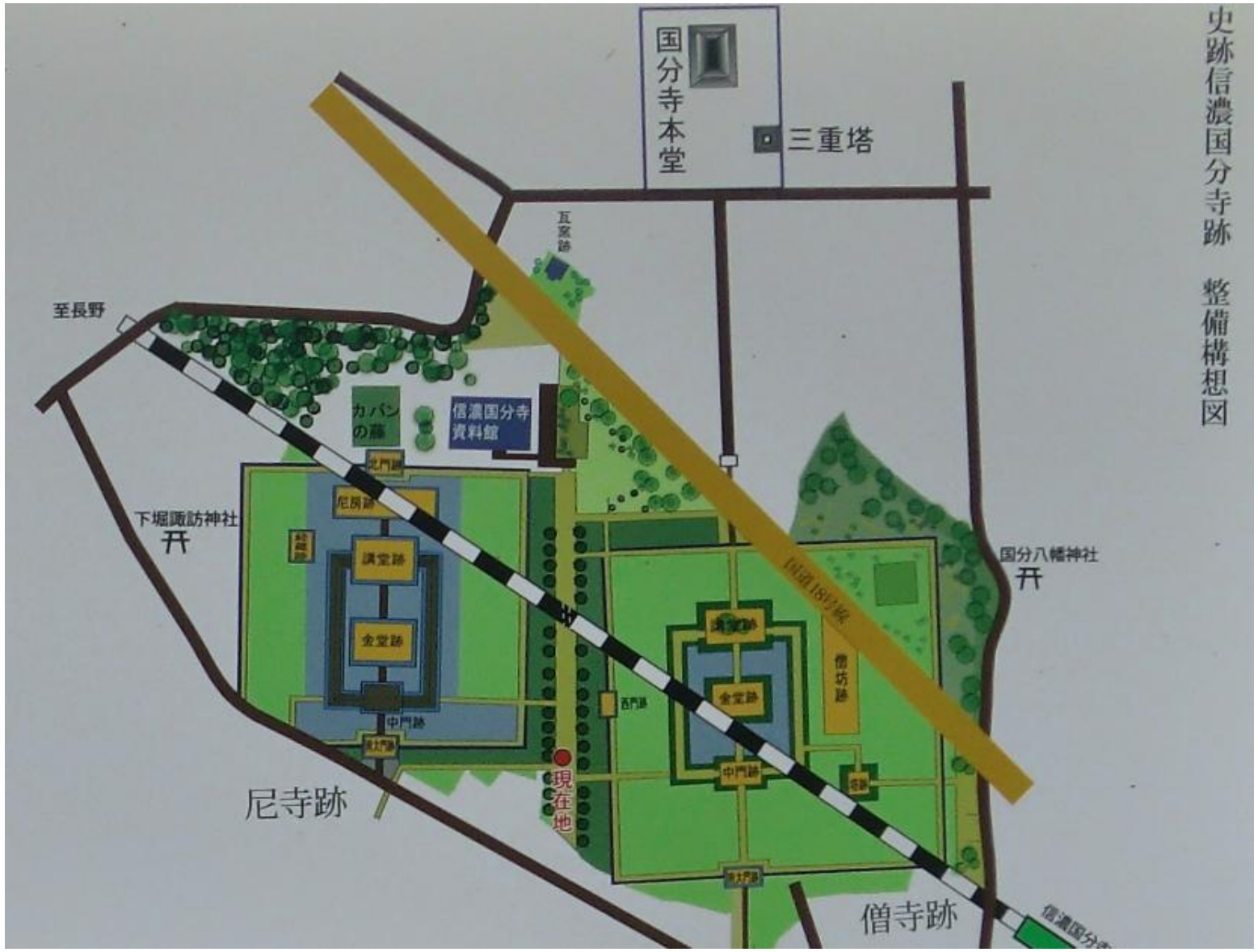
信濃国分(僧)寺跡 再調査(上田市)



前回は上図の線路の上の部分のみ見学、地下道があるのが分からず線路の下の部分を見ることができなかったという経緯がある

正面の表示は右手が尼寺跡、左手が僧寺の中門跡となっている

こちら側には中門跡と南大門跡があることが分かる

正面に中門跡がある

回廊跡が手前から右回りに中門へと続いている

右手から回廊が中門跡へと繋がっている

回廊が正面で直角に曲がり、左手の中門跡へと続く

正面右手奥の中門跡に回廊が繋がる

正面奥が中門跡

正面は中門跡

中門跡/礎石が表示されている

中門跡/前方の狭い道を進むと南大門がある

中門跡から回廊方向を見る

左手は中門跡

先程の狭い道には説明板が立っている/正面は中門跡

中門跡をアップで見る

史跡信濃国分寺跡
僧寺 中門跡
1967年の発掘調査で、基壇(きだん・建物の基礎に築いた檀)下部の石敷と、礎石の根固め栗石、雨落溝も一部で検出されました。
基壇規模は東西20.8m×南北9.4mで、建物構造については、正面18m、側面6.6mの5×2間、二層の建物と想定されています。

史跡信濃国分寺跡　僧寺中門跡
ここは、古代信濃国分寺の僧寺中門跡です。
中門は、間口５間(18.0m)、奥行き２間(6.6m)の規模で、南大門よりも大きく、二層の建物も考えられています。建物の下の基壇（土を一段高く持った基礎部分）規模は東西20.8ｍ×南北9.4ｍと判明しています。
この中門には東西の両側に、講堂へとつながる回廊が取り付いていました。回廊の形（は、幅１間の「単廊」と呼ばれる形式のものですが、この国分僧寺は梁間２間の「複廊」と呼ばれる規模の大きなものでした。回廊の基壇は、幅が5.1mあり、南北の全長は79.2ｍ、27間です。また東西長は中門を含めて66.1ｍありました。
この中門の北側（参道の向こう側）には、僧寺伽藍の中心である金堂、講堂が直線上に建ち並び、その東側には塔跡と僧房跡が、そして、南側には南大門が建つ、壮大な伽藍を形成していました。
金堂は、寺院のもっとも大切な建物空間で、中には本尊がまつられていました。建物の規模は間口７間(24.2m)、奥行き４間(14.4m)で、屋根の庇から落ちる雨水を受ける雨落溝も確認されています。基壇規模は東西29.7ｍ×南北19.3ｍあります。
講堂は、僧が仏教の学問を学ぶ建物です。間口９間(28.8m)、奥行き４間(14.0m)で、雨落溝も確認されています。は信濃国分寺伽藍の中で、平面規模はもっとも大きな建物です。
このほか、僧寺跡には僧侶の居住の建物である僧房跡や、七重塔跡と推定される建物跡が確認されています。ただ、周囲を取り囲む築地塀については、東西176.36ｍ×南北178.05ｍとほぼ100間四方の寺域があったと推定されていますが、東・北・西の門などとともに、その確認は今後の調査にゆだねられています。
平成17年12月1日
上田市教育委員会
僧寺
講堂
金堂
塔
僧房
南大門
中門
回廊
七重塔

史跡信濃国分寺跡　僧寺中門跡

ここは、古代信濃国分寺の僧寺中門跡です。

中門は、間口５間(18.0m)、奥行き２間(6.6m)の規模で、南大門よりも大きく、二層の建物も考えられています。建物の下の基壇（土を一段高く持った基礎部分）規模は東西 20.8 m×南北 9.4 mと判明しています。

この中門には東西の両側に、講堂へとつながる回廊が取り付いていました。回廊の多くは、幅１間の「単廊」と呼ばれる形式のものですが、この国分僧寺は梁間２間の「複廊」と呼ばれる規模の大きなものでした。回廊の基壇は、幅が 8.1m あり、南北の全長は 79.2 m、27 間です。また東西長は中門を含めて 66.1 mありました。

この中門の北側（線路の向こう側）には、僧寺伽藍の中心である金堂、講堂が直線上に建ち並び、その東側には塔跡と僧房跡が、そして、南側には南大門が建つ、壮大な伽藍を形成していました。

金堂は、寺院のもっとも大切な建物空間で、中には本尊がまつられていまし

た。建物の規模は間口７間(24.2m)、奥行き４間(14.4m)で、屋根の庇から落ちる雨水を受ける雨落溝も確認されています。基壇規模は東西29.7ｍ×南北19.3ｍあります。

講堂は、僧が仏教や学問を学ぶ建物です。間口９間(28.8m)、奥行き４間(14.0m)で、雨落溝も確認されています。信濃国分寺伽藍の中で、平面規模はもっとも大きな建物です。

このほか、僧寺跡には僧侶の寝食の建物である僧房跡や、七重塔跡と推定される建物跡が確認されています。ただ、周囲を取り囲む築地塀については、東西176.56ｍ×南北178.05ｍとほぼ100間四方の寺域があったと推定されていますが、東・北・西の門などとともに、その確認は今後の調査にゆだねられています。

平成１７年１２月１日

上田市教育委員会

先程の狭い道を進むとこんな風景/道の左手に説明板がある

この辺りが南大門跡

史跡信濃国分寺跡　僧寺南大門跡
ここは、国分僧寺の入口、南大門が建てられていたところです。
発掘調査では、南大門礎石の根石が確認され、間口３間（10.5m）、奥行き２間（6.6m）の八脚門（はっきゃくもん）が建てられていたことが分かりました。現存する奈良時代の建物としては、東大寺転害門（てがいもん）や法隆寺東大門があります。
建てられた時期は、金堂や講堂などの中心の建物よりは遅れています。それは、この礎石の間を南北方向に通っている暗渠排水溝（あんきょはいすいこう）と、南大門の礎石設置の構築時期の前後関係によります。ここでは、幅2m、深さ1mの排水溝の中に、人頭大～拳大の川原石とともに、金堂や講堂で使われた創建瓦の破片が出土しており、金堂や講堂などの主要伽藍（がらん）の建築工事で破損した瓦を暗渠排水に廃棄しながら暗渠排水溝を造ったと思われます。そして、この暗渠排水溝の上に南大門の礎石が込められているからです。
この南大門はおそらく瓦葺の建物であったはずですが、この区域からまとまった量の瓦や、建物の痕跡はありませんでした。これは、古代の信濃国分寺の廃絶時に、礎石や瓦を含めた主要材を他の施設のために移築したためとも考えられます。
この南大門から北には、僧寺の中門、金堂、講堂があり、その中軸線の延長上には、現在の国分寺の本堂と本堂（薬堂）があり、古代国分寺と現国分寺の歴史をつなぐ重要な線があることがわかってきました。また、南の現市道あたりには東西に築山道が想定され、古代の官道と国分寺を結ぶ線も明らかになりつつあります。
平成17年12月1日
上田市教育委員会
東大寺転害門
2004年南大門跡発掘調査
史跡信濃国分寺跡　僧寺跡・尼寺跡と現在の国分寺

史跡信濃国分寺跡　僧寺南大門跡

ここは、国分僧寺の入口、南大門が建てられていたところです。

発掘調査では、南大門礎石の根石が確認され、間口３間(10.5m)、奥行き２間(6.6m)の八脚門（はっきゃくもん）が建てられていたことが分かりました。現存する奈良時代の建物としては、東大寺転害門（てがいもん）や法隆寺東大門があります。

建てられた時期は、金堂や講堂などの中心の建物よりは遅れています。それは、この根石の間を南北方向に通っている暗渠排水溝（あんきょはいすいこう）と、南大門の根石設置の構築時期の前後関係によります。ここでは、幅２m、深さ１mの排水溝の中に、人頭大～拳大の川原石とともに、金堂や講堂で使われた創建瓦の破片が出土しており、金堂や講堂などの主要伽藍（がらん）の建築工事で破損した瓦を暗渠排水に廃棄しながら暗渠排水溝を造ったと思われます。そして、この暗渠排水溝の上に南大門の根石が込められているからです。

この南大門はおそらく瓦葺の建物であったはずですが、この区域からまとまった量の瓦や、礎石の出土はありませんでした。これは、古代の信濃国分寺の廃絶期に、礎石や瓦を含めた主要材を他の施設のために移築したためとも考えられます。

この南大門から北には、僧寺の中門、金堂、講堂があり、その中軸線の延長上には、現在の国分寺の参道と本堂（県宝）があり、古代国分寺と現国分寺の歴史をつなぐ重要な線があることがわかってきました。また、南の現市道あたりには東西に東山道が想定され、古代の官道と国分寺を結ぶ線も明らかになりつつあります。

平成１７年１２月１日

上田市教育委員会

振り返って中門跡方向を見る

更に道を進むと僧寺南大門参道と記した標柱があった/つまりこの道は参道であった

こちらは西門跡

史跡信濃国分寺跡　僧寺西門跡
ここは、古代信濃国分寺の僧寺西門跡です。
西門は、いままでの僧寺の築地塀想定ライン上より少し西側で、僧寺金堂の真西に検出されました。建物の規模は、桁行5.1m(17尺)、梁行2.7m(9尺)で、検出された柱穴は西側門の控え柱です。梁行の中間には、礎石の上に立つ礎柱があり、そこに扉が付いていたと考えられます。門の西側1.8m(6尺)の箇所には、並列する2列の柱穴が同じ桁行で検出され、扉が付属していたと推定されます。
この門は礎石建ちではなく、掘立柱であることや、出土する瓦の量がきわめて少ないことから、板葺や柿葺きの屋根であったと考えられます。この西門の確認により、僧寺築地塀のラインが、これまでの想定ラインより5m西に振れていること、そして、この門が、僧寺と尼寺の間を南北行すると推定される道路に面しており、僧寺と尼寺とを繋ぐ出入口であることなど、たいへん多くの情報を提供しています。
平成22年3月1日
上田市教育委員会
国分寺本堂
三重塔
尼寺跡
僧寺跡
史跡信濃国分寺跡　整備基本図
僧寺西門復元想像図
僧寺西門跡発掘調査（真上から／写真上が北）
僧寺西門跡模式図

史跡信濃国分寺跡　僧寺西門跡

ここは、古代信濃国分寺の僧寺西門跡です。

西門は、いままでの僧寺の築地塀想定ライン上より少し西側で、僧寺金堂の真西に検出されました。建物の規模は、桁行 5.1m(17　尺)、梁行 2.7m(9 尺)で、検出された柱穴は四脚門の控え柱です。梁行の中間には、礎石の上に立つ親柱があり、そこに扉が付いていたと考えられます。門の西側 1.8m(6 尺)の箇所には、並列する 2 個の柱穴が同じ桁行で検出され、廂が付属していたと推定されます。

この門は礎石建ちではなく、掘立柱であることや、出土する瓦の量がきわめて少ないことから、檜皮葺や板葺きの屋根であったと考えられます。この西門の確認により、僧寺築地塀のラインが、これまでの想定ラインより 5m 西に振れていること、そして、この門が、僧寺と尼寺の間を南北行すると推定される道路に面しており、僧寺と尼寺とを繋ぐ出入口であることなど、たいへん多くの情報を提供しています。

平成２２年３月１日

上田市教育委員会

参考ホームページ

http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kokubunji/park.htm

http://museum.umic.jp/map/document/dot56.html

インターネットより